

若手技術者へ贈る言葉

覚悟をもってやりとげよう



奥田孝一

はじめに

2019年3月に兵庫県立大学を定年退職し、現在は兵庫県立但馬技術大学校で技能教育・職業訓練の職務に携わっています。機械学会と精密工学会は学生時代より会員となっていました。私の研究分野が切削加工ということもあり、砥粒加工学会での活動は比較的あとのこととなります。

今から思えば、学生時代の就職・職業選択肢として大学教員・研究者は全く頭にありませんでした。大学院を修了して民間企業の一エンジニアとして仕事をしていくものと思っていましたし、実際にある企業の推薦をもらえたところでした。ところが、その直後に指導教授より高専教員への話があり、結果として教員への道が始まることとなりました。

このように、ちょっとした偶然？から考えてもいなかった職に就くことになりましたが、振り返ってみればこれまで人生の節目でさまざまな偶然があったように思えます。本稿では研究開発への情熱、姿勢、取り組み方などは違った視点から述べたいと思いますが、これから30年、40年と技術者、研究者として仕事を続けていくであろう若い人たちに良くも悪くも少しでも参考になれば幸いです。

若いうちから身に着けたい時間感覚

希望していた企業に晴れて入社できたけど思ってもみなかった部署に配属されたとか、上司あるいは教授から言われて自分の専門分野と違った研究テーマに取り組むことになったとか、そういう経験をもつ人は結構いるのではないのでしょうか。自分の意に沿わないことに対してしっかり自己主張するというのも1つの方策であり、そうしなければいけない時もあるとは思いますが、とくに若いうちは素直に受け入れることの方が結果的に良い方向に行くことが多いような気がします。まずはやってみる、それから考えようぐらいの軽い態度の方が心の負担が少なくなるのではないのでしょうか。

私が思いがけず神戸高専の教員になったとき、教育実習の経験もないのに教壇に立ち、クラブ活動の顧問をし、良いとはいえ研究環境のなかで研究もしなければならぬなど、全て一人でやらなければならず時間がいくらあっても足りないような状態でした。そのため時間を失わないこと、異なる複数の仕事を効率

的にこなすための方策などいろいろ工夫せざるを得ませんでした。ビジネス本、啓発本に書いてあるようなことですが、時間(約束)を守る、すぐできることを後回しにしない、必要な準備を必要なタイミングでしておくなど時間感覚をしっかりと持つことが重要となります。

じっくり考える時間を作ると同時に、頭をすばやく切り替えてすさまじく時間をうまく使うことができればなお良いと思います。企業ではよく4Sとか5Sといわれますが、整理整頓がうまくできている人は、必要な情報を必要な時にすばやく引き出すことができ、無駄な探し物時間を少なくできます。

就職先のことをよくも知らずに、無頓着に就職を決めた自分のせいではあります。必要に迫られているような取り組みましたが、後々に役立つような気もします。

決めたことはやりとげる

当時(1970年代)の高専では、今ほど博士号をもっておられる教員は多くなかったのですが、研究者としてやっていくためにはやはり博士の学位が必要だと考え、当時としてははしりであった社会人ドクターの制度を使って出身の神戸大学に入学し、超精密切削加工に関する研究を森脇俊道先生の指導のもとに始めました。

社会人ドクターとして入学するにあたって、学内ではいろいろな意見をもらいましたが、最終的には自分の意思を通すことにしました。まさに「賽は投げられた」とでもいうように突き進むしかないという感じです。二足の草鞋を履くことになりましたので、体力的にも精神的、経済的にもかなりのプレッシャーのなかで3年間過ごしました。結果論として、このタイミングで決断していなかったならば、今とはまったく異なる人生になっていたと思う。

何かをやるうとした時、必ずいろんなアドバイスがきます。人の意見には耳を貸さず(難しいところですが…)突っ走る、チャレンジするという気概で決断しなければならぬ時が、長い人生のなかで1、2回はあるのではないのでしょうか。失敗が致命的になる可能性もありますが、仮にうまくいかなかったとしても何とかするぐらいの鷹揚な態度で臨む人の方が、ストレスも溜まらずうまくいく可能性が高いような気がします。

人の縁と運は大事に

学位は得たものの、研究環境という意味では高専は大学のようにはいかないので、出身大学の研究室に引き続きお世話になりました。教員スタッフ始め学生達も非常にアクティブで、それに引っ張られるように何とかやってきました。物事に熱心に取り組んでおられる先輩や先生(上司)のそばにいて、自分もやれるような気がしてくる(いわゆるエネルギーをもらえる)という経験は多くの方がしていると思います。自分自身の経験や力量はまだまでも、意識的にでもそういう人に近づいて自分の糧にして欲しいと思います。重い仕事を頼まれることになるかもしれませんが、自分のレベルアップにつながるが多いように感じます。そういう経験によって、そのうち優秀なリーダーとして振る舞えるようになるかもしれません。

明石海峡大橋の建設の時期と同じくして、神戸側橋台(神戸市舞子)の近くにあった高専が学園都市に新築移転することになり、全国で一番新しいキャンパスとなりました。これを機会に中身も全国一の高専にしたいという意欲もわいていました。そのような気持ちを持って新しいキャンパスでいろんな取り組みをしていましたが、姫路工業大学(現兵庫県立大学)に新しい学科(工学部機械知能工学科)ができるということで、生産加工学分野の助教授に応募しました。高専も新しくなったばかりで、一定の評価もうけていたのですが、大学という新たな環境でやってみたいという欲求の方がまさったということになります。

幸い採用され、古くなったキャンパスのなか唯一の新棟の研究室に入るようになったのですが、あらゆるものを一から作らなければならない状況でした。1年生しかいない学科の教育体制づくりから工作機械1台無いという研究室の整備まで、最初の1,2年は研究どころではありませんでしたが、東芝機械(当時)の田中克敏氏には大変お世話になり、超精密切削加工の研究ができる体制をなんとか作ることができました。

また、着任して4年目に思いがけずアメリカのイリノイ大学に在外研究員として1年間行けることになったのですが、いろんな人との縁、幸運のたまものでもありました。袖触れ合うは多生の縁といいますが、人生において人との出会い、縁、運がどこかでつながって、好ましい結果に結びつくことは往々にあるということです。自分でコントロールできるものではありませんが、自分は運をもっているという意識は大事です。

松下幸之助氏は面接の最後に「あなたは運がいいですか？」と必ず質問したという記事を読んだことがあります。「運が悪いです。」という人は、どんなに学歴が

よくても落としてしまう。逆に、「運がいい」と言える人は「人に恵まれている」ということだから採用するとありました。「えっ」というような判断ですが、ある意味その人の本質、将来性を表しているのかもしれない。

自信より覚悟

私自身は大それた野心めいたものなどとくになく、地方大学の平凡な一教員という意識でありましたが、とりあえず目の前のことは真剣に一生懸命取り組む、責任もってやり遂げるという気概でやってきました。基本的に頼まれたら(自分の助けが必要とされていたら)、引き受けるということをやったので、自然に仕事量は増えてきますが、先述したようなビジネススキルのなことでは何とかなってきたのは幸いでした。

学生さんに何か頼むと、やったことがないとか自信がないとか言って、やんわりと逃げられることがあります。社会人でも、経験のないこととか責任の重いことは腰が引けることが多々あると思います。それも当然かと思えます。しかし、物事を決断する基準は、経験がある、慣れている、自信があるというようなことではなく、覚悟がもてるかどうかだと思います。仮にうまくいかなかったとしても、その結果を受け止め、どんな責任でもとれるぞというような覚悟がもてるかどうかです。もちろん、誰も失敗などしたくないので、うまくいくよう必要な準備、方策を考えるわけですが、それでもうまくいかない場合はあります。どんな結果でも受け入れる心の広さ、強さを持って下さい。

教授になってから、いくつか責任ある役職に就きましたが、謂われたときには勤まるだろうかという思いで一杯でした。「役職が人を作るんだ」ぐらいの覚悟をもって臨むようにしました。周囲から見れば、「貧乏くじ」や「火中の栗」のようであっても、長い目で見れば意外とそうはならないものです。

おわりに

本稿では、私自身の経歴の一部を紹介しながら、その時々での人生訓めいたものを述べました。学生時代の能力としては学力が最重視されるかもしれませんが、社会人としてはもちろん学力に裏付けされた高い研究・開発能力は重要であります。他の能力のウェイトが大きくなります。俗な言い方をすれば、出世するには総合的に人間としてのふるまい、器も重要な因子となります。出世することだけが人生の目的ではないと思いますが、若い人には常に高みを目指してほしいと思います。

おくだ・こういち:兵庫県立大学名誉教授/兵庫県立但馬技術大学校長